2011年 白道会大会

浄土からのメッセージ

―人間よ、同朋たれ！―

尾畑文正先生

去る八月六日・七日、本通支坊で白道会大会が開かれました。今年は同朋大学（名古屋にある真宗大谷派の大学）学長、尾畑文正先生にご多忙の中お越し頂きました。（以下は公開講演会の要旨）。

悲しむ心の回復

三月に東日本大震災と原発事故が起きました。地震や津波は天災ですが、原発事故は究極の人災です。大学の卒業式祝辞で、私は学生にこういいました。

被災された当事者の悲しみはもちろんですが、私たちは、対岸の火事ではなくいかにそのことに悲しみの心を持つことができるのか。今から私たちが人間として一歩を踏み出してゆく上で、大切な鍵となると思います、と。

私たちは、日々安穏に暮らしています。しかしそれは、他者を犠牲にするシステムの上に成り立っている安穏であり平和です。格差が広がり、人と人とのつながりが切り刻まれ、人間であることを見失っている、それは地獄であり畜生の世界です。阿弥陀さまはなぜ本願を誓われ、浄土を建立されたのか。それは、悲しむ心を失い、人でありながら人でなくなっている私たちに、人間を取り戻させ、回復させるためなのです。私たちは人間でありながら地獄・餓鬼・畜生（いかり・むさぼり・愚かな心に縛られた存在）になっている。

私たちは、「悲しみを見すえ、悲しみをふまえて、悲しみを背景にして」あらためて人間として生きると言うことはどういうことかということを問い直していくことが大切です。その意味で、「人間よ、同朋たれ」ということを講題とさせていただきました。

同朋とは

同朋大学の同朋とは人と人との豊かな関係をいいます。

和辻哲郎は、人間とは、人と人との間、間柄存在だといいます。その間柄を失った最たるものが戦争です。私は戦争は政治の敗北だと思っています。戦争をいかに防いでいくか、いかに衝突を避けて平和な国際関係を常態化していくかが政治家の役割。戦争するなら私でも政治家になれる。戦争には間柄がない。「奴は敵だ。敵は殺せ（埴谷雄高）」がその究極。親の決めた結婚で苦しみ、自死せねばならないような世界もそうです。

私と浄土真宗

私はお寺の生まれではありません。私は五人兄弟で四番目。三番目の姉は進行性小児リュウマチで一〇歳で動けなくなりました。母はあちこちの病院をまわりましたがだめで、病気を治すため新興宗教に入信し、必死で信仰していました。

ところが一九五九（昭和三十四）年伊勢湾台風の洪水で姉は溺れ、翌日亡くなってしまいました。十七歳でした。それから母は、命をながらえさせるとか、病気を治す宗教はもういい、人間はだれもが独り生まれ死んでゆく。ならば死ということを通して生きることを考える教えにあいたいと浄土真宗に立ち返っていきました。私は茫然自失、完全に宗教嫌いになりました。しかしそれは、真実でないものを真実とし、頼るべきでないものを頼ってい

た、私の心が間に合わなかっただけだと後で知らされました。

その後、ある時友人に「お前何のために生きているんだ」と言われ全く答えられませんでした。その時に姉の言葉が思い出されたのです。

姉は死ぬ時「私がもう少し生きることができたなら仏教を勉強したい、自分の兄弟で仏教を勉強する子ができたら本当に嬉しい」と言って息を引き取ったのです。私は姉の動かない足を蹴っていじめていた意地悪な弟だったので、その言葉が耳に残りました。

姉は生きることが出来たら仏教を勉強したいと言っていた。だから仏教は生きることを教えてくれるかもしれないと、その答えを求めて仏教を勉強することにしました。姉の七年の法事に池田勇諦（元同朋大学学長）さんのご縁で同朋大学に学びました。しかし、学んでもよく分からず、行きづまりました。その時、また姉のことが思い出されました。

浄土の意味

姉が十五歳頃、手鏡を持ってきてほしいと言いました。夕食の時、姉はその手鏡で食事をする私たちを見ていました。私は腹が立って「何をやっとるんや、あんたが食べとるものも僕らが食べとるものも同じや、旨いものを食べとるわけとちがう」と言って鏡を取り上げたことがありました。後になって私が思いますのは、姉は手鏡を通して、他者とともに生きる自分、豊かな関係で生きる自分、つまり浄土を求めていたのではないかと思われるのです。浄土とは、架空の存在ではなく、私たちが生き、また死んでゆくのに不可欠な世界です。人として本当に生きることの意味、人間であることを見失った私たちに人間を取り戻させる世界、この浄土を明らかにして下さる仏法が浄土真宗です。浄土からのメッセージを通して、自己を見失い、世界を見失っている自分を見いださせていただく。「人間よ、同朋たれ」とは「人間よ、人間たれ」ということです。

社会に関わる仏教

私が姉の死を通して触れさせてもらった仏教は、個人としての自分を磨くとか成長させるということよりも、同朋として、縁起・無我として、人と共に生きている存在に気づかせてもらうのが仏教ではないかと思います。その視点で仏教を分けると、「社会に関わる仏教」と「社会に関わらない仏教」に分けることができると思います。前者は、吉田兼好の『徒然草』に「仏道を願うとは別のことなし。暇ある身になりて世のことに心をかけぬを第一の道とす。」とあるように、津波でたくさんの人が亡くなろうとも、原発事故で多くの方が古郷を追われて被曝しようとも、そのことには気にかけず、心を安定させて智慧を開発するのが仏教だという理解。多くの人はこう理解しているのではないでしょうか。そういう誤った考えに支配されている人は、宗教者が社会のことに関わると、それは宗教者の関わることではないと揶揄します。

私は、浄土真宗は人と人とが豊かに生き合う宗教、当然社会に関わる仏教だと思っています。親鸞聖人は「世のいのりに心いれてもうしあわせたまふべし」とおっしゃっ

ている。被曝労働者を限りなく再生産しながらの私たちの豊かさは、本当の安穏ではない、そういうことを考えながら社会に関わる仏教、その代表者がベトナムのティックナットハンというお坊さんです。ベトナム戦争の時に、南北ベトナム政権に戦争をやめるよう訴えた方。この人が提唱する仏教がソーシャル・エンゲージドブディズム（社会参加型仏教）。私の存在は、縁起として同朋としての存在だと気づくのが彼の座禅。エンゲイジは関わるという意味と参加するという意味があります。

社会を切り離して仏教を学ぶのではなく、社会との関わりの中で仏教を学んでゆく。真宗的にいえばだれもが阿弥陀さまに願われている、つかみとられている存在なんだと気づいてゆくことだと思います。

質疑応答

Q　高齢化社会ですが、子供らは離ればなれ。宗教としてどう関わりますか。

A　お寺が避難場所になるというのもひとつだと思います。そして、家族に限らず、地域ぐるみで支える、地域の一人ひとりが、「私たちのおばあちゃんだ」という人間観を形成する、そのお手伝いをすることも宗教の役割ではないでしょうか。

圓石先生のワンポイントアドバイス

真宗門徒が多い地域は、病んでも祈祷、まじない、お札に頼らない伝統があり、町にお医者さんや薬屋さんが多いのが特徴です。

昨年二月と十月、蔵本通支坊と長ノ木本坊の法座で、圓石正武（呉市郷町圓石医院院長）先生におこしいただき、健康ワンポイントアドバイスをいただきました。二月は血圧、十月はインフルエンザ。インフルエンザ注射は高価だが、二回もせねばならないのか、私たちが普段感じている素朴な疑問にお答えいただきました。

去る9月13～15日、京都西本願寺親鸞聖人750回会の法要に　安芸南組（近隣60ヶ寺）として、39名が西教寺から団体参拝しました。法要後帰敬式（法名をいただく式）、翌日、大谷本廟に参拝して、聖人ご修行の地比叡山に参詣。鳥取県三朝温泉泊、妙好人足利源左（みょうこうにん・あしかがげんざ）さんのお寺願正寺にお参りしました。